

## 発見！ 石田ゆり子写真集

年末年始に相次いで両親を見送ったので、折に触れ実家の片づけをしている。

『石田ゆり子写真集』が出てきた。表紙をめくると、「祝喜寿 和野内勇 様」と添え書きしたサインがある。

1950年くらいまでのことであろう。高度経済成長期以前のこと。

もう「歴史」の話になる。

会社と従業員の関係、労働についての法律や仕組みが緩やかだったのだろう。また、戦後の民主化が行われる前は、地主や小作、経営者と労働者の貧富の差が大きかった。宮沢賢治の文章や、テレビドラマ『おしん』を見ると想像できる。江戸時代の時代劇に出てくるような丁稚※もいたようだ。

母の実家は黒沢尻(北上)の町なかで文房具や本を売る商店だった。北上も、今は道路が整備され自動車もあり、近隣の和賀や稲瀬、梁川、口内あたりとの行き来は容易になったが、当時はそうではない。冬期間は雪に閉ざされる。物流を自動車が担う前なので、在(在郷)の人がリアカーに野菜を積んで町場に行商に来たりしていた。そんな時代である。5人とか6人とか、どの家でも子どもが多く、在の農家の子どもは早くから町場の商家に働きに出されていた。

母の実家でも、数人を雇っていて、その中に十代の女の子と少年もいたと聞く。家族同様にその子たちも養っていたらしい。女の子は「子守」だったそうだ。「子守」とは、親が働いている間、子守を主に言う人である。少年は主に家業に携わっていた。

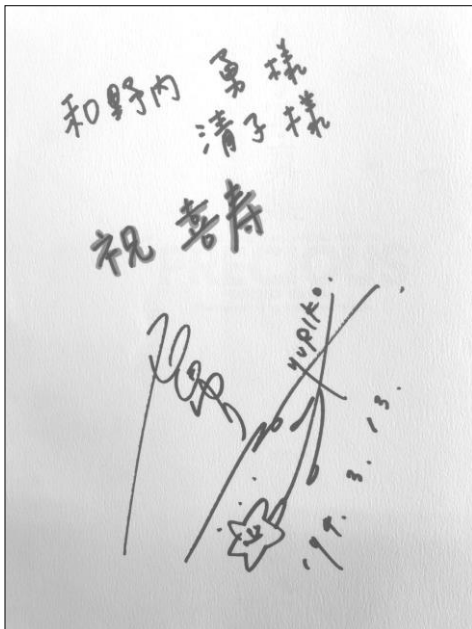
「和野内勇」とは、その少年である。

## イギリス国鉄にも詳しい小学生

母と和野内さんの交流は和野内さんが亡くなるまで続いた。血のつながりはないのだが親戚以上のお付き合いだった。私の家では皆「勇さん」と呼んでいた。和野内さん夫婦には子がなかったので、私も弟もかわいがってもらった。

日本郵船株式会社という会社がある。皆さんが知らない会社だと思うが、日本の海運業界の雄である。三菱グループ。明治以降の日本の近代化を海運で支えてきた大企業である。本社は皇居の目の前。東京駅との間にある。昨年COVID-19後の世界的な景気回復による海上貿易の復活を見込んで株価が上昇していることが話題になった。超難関大学を卒業しないと入社できないような会社である。

どういう経緯か知らないが、勇さんは十代後半に上京し日本郵船に勤めた。大学も出ていない。それなのに、重用され、1965年から社長になった有吉義弥の秘書を務めた。たたきあげである。母が若いころ上京した折に食事の約束をしたりすると、黒塗りの社用車が迎えに来たそうだ。



日本は、1964年に外貨規制が緩和され、海外渡航が自由化された。簡単にいえば、それまで一般の人は海外に出られなかった。自由化されても、海外旅行が身近になるのは1980年代である。私が幼稚園から小学生のころ、勇さんが我が家に来るときのお土産は泉屋※のクッキーと、私への外国製のおもちゃだった。海外旅行など考えられなかったころに、社長とともにたびたび欧米に出ているためである。鉄道が好きな私はしばしば持ってきてくれる外国製のNゲージ鉄道模型が楽しみだった。そのため、私は子どもながらイギリス国鉄の車両にも詳しい、妙な小学生だった。

## 田中角栄と筒井裕子さん

海外だけではなく、田中角栄の私邸にも何度か行ったと聞いたことがある。田中角栄が権勢を誇っていたころ、「目白台の田中邸」は政財界の有力者が出入りする超有名な場所だったが、そこに、海運業界を束ねていた有吉社長の用事を伝えに出向いたそうだ。

勇さんは、定年後、調布にある「日本郵船飛田給体育場」の管理人を勤めた。そこは、グラウンドがあり、プールも体育館もある。「合宿施設もあり宿泊できるから、いつでも遊びに来て…」といわれ、私は中学から大学にかけ

てしばしば泊りに行き、そこを拠点に東京をぶらぶらしていた。会社の宿泊施設なので、食堂の冷蔵庫にはジュースもアイスもあって、自由に食べていいといわれていた。大学時代は、食堂の大きなテレビで岩手では放送していない『夕焼けニャンニャン』を「食べ放題」のアイスを食べながら見るのも小さな楽しみだった。

大学生のころ、勇さんが「本社の人事部に用事があるから、付き合わないか？」と誘ってくれた。郵船の本社など行く機会がないので、よろこんで誘いにのった。地下鉄を降りて、本社に行き、エレベーターを人事部のある14階で降りると、広い窓の外に広がるのは皇居だった。それだけでなく、大会社の本社など踏み入れたことがないので、ドキドキした。今は女性社員に制服がないのは普通になったが、当時(1985年ころ)はまだまだそうではなかった。しかし、郵船はオフィスカジュアルで、その先進的なムードにも圧倒された。

「借りてきたネコ」のように、勇さんの後についてまわった。

用事が一通り済んでから、「人事部に岩手から来た子がいるんだ、これこれ子の人」と紹介してくれた方が、実は知っている人だった。

私が小学5年生のとき、筒井順子さんという転校生がクラスに来た。お父さんが北日本相互銀行(現:北日本銀行)の支店長さんで、転勤にともない水沢に来た。支店長の社宅が日高小路にあって、順子さんとは仲が良かったので何度かお邪魔した。その後も仲良しの友だちだったが、順さんは高校に入るときに盛岡に引っ越していった。

順さんのお姉さんは裕子さんとおっしゃるのだが、水沢高校を卒業し、東京大学文科III類に現役で合格したと有名だった。お姉さんには、お邪魔した際にお会いして面識があった。郵船の人事部にいらしたのが、その筒井裕子さんだった。

その数年後、筒井裕さんは、客船「飛鳥」の企画のお仕事をなされ、日本のクルーズ文化の発展に尽力されていると雑誌に取り上げられたのを拝見したことがある。今は帰国なさっていると思うが、数年前は郵船のロンドン支店で責任ある役職をなさっていたようだ。

(表面につづく)



日本郵船の客船 飛鳥 II

## ゆり子さん…ステキ！

話を石田ゆり子さんに戻す。

以前は石田ゆり子さんに関心がなかったが、おとし、TBS のドラマ『妻、小学生になる。』を見て、ステキ！と思った。私よりちょっと年下だけなのに、見るからに若い、そして明るく、かわいい！「MEGA BIG」のCMを見かけるとときめく。

写真集の表紙をめくると、「和野内勇 様」と添え書きしたサインがある。弟が勇さんのところに行ったときにもらってきたということは聞いていたが、実際に見たのは初めてだった。

勇さんと、ゆり子さん、妹のひかりさんとは、やり取りがあった。勇さんは、晩年奥さんの実家のある函館に移り住んだ。石田さんがご姉妹で、何度かそこへ遊びに来ていた話も聞いていた。

ゆり子さんのお父さんが話題になったことがある。「頑固おやじ」でかわいお父さんだということで取り上げられていた。そのお父さんが郵船 OB なのである。それで、勇さんと

お父さんがつながり、ゆり子さん、ひかりさんもつながる。

大きさにいえば、田中角栄から、筒井さん、ゆり子さんまで、大きくつながっていく。

## 人がつながる時代

さまざまなツールで人がつながる現代、「友だち追加」とか「お気に入り」とか、そんなことでつながりを持っているような気がしている世の中になった。それが本当に実をとまっているかということなどもあやしい。東日本大震災後に「絆」が盛んにいわれたが、やはり、いわれなくなった。

私もなんとなくひとりであることが多い。ひとりで行動するほうが気楽で、仲間をつるむことは窮屈だ。

そんなことをぼんやり考えながら、石田ゆり子さんの写真集を眺める。あまり手あかをつけると、ついでにはずのゆり子さんの指紋が薄れてしまう。気をつけよう…

※丁稚…でっち 商家に年季奉公する幼少の者  
※泉屋…日本で初めてクッキーを販売した老舗店

(佐藤貴之)



石田ゆり子写真集 (94年) より

## 新購入図書 おすすめの本

### 成瀬は天下を取りに行く

宮島未奈 著 新潮社



中2の夏休みの始まりに、幼馴染の成瀬がまた変なことを言い出した。コロナ禍、閉店を控える西武大津店に毎日通い、中継に映るといふのだが……。さらには M-1 に挑み、実験のため坊主頭にし、二百歳まで生きると堂々宣言。今日も全力で我が道を突き進む成瀬から、誰もが目を離せない！

### ゴリラ裁判の日

須藤古都離 著 講談社



ローズはとても賢く、特別なゴリラだ。言葉を理解し人間と「会話」ができる。やがて「声」も手に入れた。これからもっと楽しい生活が始まる。そんな時だった。人間の子供を助けるために、という理由で、夫ゴリラが、突然、射殺される。許せない。そしてローズは、人間に戦いを挑む。力ではなく、知恵と勇気を武器に。法廷で。

### 月と散文

又吉直樹 著 KADOKAWA



いろんなものが失くなってしまった日常だけれど、窓の外の夜空には月は出ていて、書き掛けの散文だけは確かにあった——

16 万部超のベストセラー『東京百景』から 10 年。又吉直樹の新作エッセイ集。